

127 (そうこうしているうちに) もだえ苦しんだ夏の猛暑も少しは和らぎ、
128 そろそろ涼しい気配が順序どおりに訪れるはずで、間もなく秋が到来しよう。
129 (古代においては) 灰を吹いて、その灰の飛び散り具合で気候を推しはかり、
130 北斗七星の柄の指し示すところによって、天の運行や季節の変化を知った。

【十四段】

131 (ところが、今の私は) 都から引き離されて、ますます(時節のみならず) 時勢との隔たりも深くなり困窮
している。

132 京の家族からの手紙も途絶えて、家族の様子も分からない。

133 私の体は痩せて帯がゆるくなり、紫の官服も色あせて、それを見ては涙がこぼれる。
134 鏡を照らして、そこに映った白髪頭を見ては嘆き悲しむ。

135 この太宰府で一人もの思いにふける様は(あたかも) たった一羽で雲を押し分け飛んでゆく雁のように切な
くわびしいものだ。

136 私の泣く声は、秋風に吹かれて木肌にしがみついて寂しい声で鳴いている、つくつく法師のようだ。

137 蘭(藤袴)の花が萎みおちて芳しい香りがなくなるのを(都を去り太宰府の地に赴いて) 初めて目の当たり
にし

138 月が満ちるのを九度見た。(外界は今、九月を迎えたのである)。

139 何も無いがらんとした部屋にいて貧しさにも慣れ

140 門は閉ざしたまま鍵をはずすのも億劫だ。